

2 病虫害発生予察

農業生産の安定と生産性の向上を図るとともに、高品質で安全・安心な農産物を生産するため、主要 16 作物に被害を与える 176 病虫害の発消長や農作物の生育状況等を調査した。これらの調査結果と病虫害の生態、気象の経過と予報等を基に、病虫害の発生時期や発生量を予察し、生産者を始め農業団体や市町村、関係機関等に情報を提供し、病虫害の的確な防除を推進した。

(1) 対象作物及び有害動植物

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
普通作物	水 稲	いもち病、紋枯病、白葉枯病、ばか苗病、もみ枯細菌病、ごま葉枯病、縞葉枯病、稲こうじ病、ニカメイガ、セジロウンカ、トビイロウンカ、ヒメトビウンカ、ツマグロヨコバイ、イネドロオイムシ、斑点米カメムシ類（アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ、ホソハリカメムシトゲシラホシカメムシ、シラホシカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタオビコヤガ、コブノメイガ、イネミズゾウムシ	イチモンジセセリ（イネツトムシ）、スクミリンゴガイ
	麦	うどんこ病、赤かび病	黒穂病類（裸黒穂病、なまぐさ黒穂病）、黒節病 アブラムシ類（ムギヒゲナガアブラムシ、ムギクビレアブラムシ）、ムギダニ、シロトビムシ類
	小 麦	さび病類（赤さび病）	縞萎縮病
	大 麦	さび病類（黄さび病、小さび病、黒さび病）	縞萎縮病、斑葉病
	かんしょ	ナカジロシタバ、ハスモンヨトウ	つる割病、立枯病、基腐病 イモキバガ（イモコガ）、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
普通作物	大豆	紫斑病、アブラムシ類（ダイズアブラムシ）、ハスモンヨトウ、マメシンクイガ、吸実性カメムシ類（アオクサカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、ミナミアオカメムシ）、フタスジヒメハムシ	ウイルス病、立枯性病害、葉焼病、べと病、茎疫病 コガネムシ類（アカビロウドコガネ、アオドウガネ、ドウガネブイブイ、オオクロコガネ、ヒメコガネ、マメコガネ）、食葉性チョウ目幼虫、シロイチモジマダラメイガ、ダイズサヤタマバエ、ウコンノメイガ
果樹等作物	なし	黒斑病、黒星病、赤星病、シンクイムシ類（ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ）、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、ハダニ類（カンザワハダニ、ミカンハダニ、ナミハダニ、リンゴハダニ）、カイガラムシ類（クワコナカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ）、アブラムシ類（ナシアブラムシ、ワタアブラムシ、ユキヤナギアブラムシ）、果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、クサギカメムシ、ツヤアオカメムシ）	うどんこ病、輪紋病 ニセナシサビダニ
	茶	炭疽病、ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ、チャハマキ）、チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、ハダニ類（カンザワハダニ）、アザミウマ類（チャノキイロアザミウマ）、カイガラムシ類（クワシロカイガラムシ）、チャトゲコナジラミ	もち病、輪斑病 カメムシ類（ツマグロアオカスミカメ）、ヨモギエダシャク、ナガチャコガネ

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜	トマト	疫病、灰色かび病、葉かび病、黄化葉巻病、うどんこ病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ）オオタバコガ、 コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ワタアブラムシ）、ハスモンヨトウ	萎ちょう病類、青枯病、 ハモグリバエ類、
	なす	うどんこ病、灰色かび病、すすかび病、 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、オオタバコガ、ハスモンヨトウ、 アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ジャガイモヒゲナガアブラムシ、チューリップヒゲナガアブラムシ、ワタアブラムシ）、 ハダニ類（カンザワハダニ、ナミハダニ）	褐紋病、褐色腐敗病、半身萎ちょう病、青枯病、 ハモグリバエ類、ホコリダニ類
	きゅうり	べと病、炭疽病、うどんこ病、斑点細菌病、灰色かび病、褐斑病 アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ）、コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、 ハダニ類（ナミハダニ）、 アブラムシ類（ワタアブラムシ、モモアカアブラムシ）、ハスモンヨトウ	モザイク病、菌核病、黄化えそ病、退緑黄化病、 ハモグリバエ類、食葉性チョウ目幼虫

区分	対象作物	国の指定有害動植物（注1）	県の有害動植物（注2）
野菜	ブロッコリー	コナガ、ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、オオタバコガ、ヨトウガ	黒腐病、べと病、軟腐病、花蕾腐敗病、黒斑細菌病、黒すす病、アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハイマダラノメイガ
	ねぎ	さび病、黒斑病、べと病 ハスモンヨトウ、シロイチモジヨトウ、アブラムシ類（ネギアブラムシ、ワタアブラムシ）、ネギハモグリバエ、アザミウマ類（ネギアザミウマ）、ネギコガ	萎縮病、小菌核腐敗病、軟腐病、白絹病、黒腐菌核病
	さといも	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハスモンヨトウ	汚斑病、疫病、ハダニ類（カンザワハダニ）
	ほうれんそう	アブラムシ類（モモアカアブラムシ、ダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ）、ハスモンヨトウ	べと病、立枯病、シロオビノメイガ、アザミウマ類（ミナミキイロアザミウマ）、ケナガコナダニ、
	いちご	灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、ハスモンヨトウ、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ）、アブラムシ類（ワタアブラムシ、イチゴネアブラムシ）、ハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）コナジラミ類（オンシツコナジラミ、タバココナジラミ）、オオタバコガ	萎黄病、輪斑病、ホコリダニ類、
小計	16 作物、104 病虫害	16 作物、72 病虫害	
合計	16 作物、176 病虫害		

(注1) 「国の指定有害動植物」とは、国が指定有害動植物発生予察事業計画で定めた発生予察事業の対象病虫害。

(注2) 「県の有害動植物」とは、埼玉県が国と協議して設定した発生予察事業の調査対象病虫害。

(2) 予察ほ場及び巡回調査地域等

ア 県予察ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
	麦	1	熊谷市玉井（農業技術研究センター玉井試験場）
果樹特産	なし	1	久喜市六万部（農業技術研究センター久喜試験場）
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
野 菜	トマト	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	きゅうり	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
	いちご	1	熊谷市須賀広（農業技術研究センター）
計		7	

イ 予察灯設置ほ場

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻	6	川越市南田島、川島町上八ツ林 本庄市児玉町吉田林、熊谷市玉井、加須市大越、春日部市樋籠
果樹特産	な し	3	上里町長浜、春日部市内牧、久喜市六万部
	茶	1	入間市上谷ヶ貫（茶業研究所）
計		10	

(注) () 書きのある予察灯は、() 内の機関が調査している予察ほ場である。

ウ 巡回調査地域

区 分	対象作物	箇所数	ほ 場 所 在 地
普通作物	水 稻 (早植)	8	川越市小中居、毛呂山町箕和田、吉見町西吉見、 熊谷市中曾根、加須市麦倉、加須市大越 春日部市樋籠、幸手市神扇
	水 稻 (普通植)	6	坂戸市横沼、川島町曲師、嵐山町吉田、 本庄市児玉町吉田林、美里町小茂田、吉川市中井
	麦 (大麦)	3	川島町東部、加須市大越、白岡市太田新井
	麦 (小麦)	8	川越市古谷上、坂戸市片柳、川島町東部、 本庄市児玉町吉田林、熊谷市飯塚、熊谷市樋春、 行田市前谷、蓮田市駒崎
	かんしょ	2	川越市中台南、三芳町上富
	大 豆	6	川越市古谷上、嵐山町志賀、熊谷市板井、熊谷市樋春、 加須市間口、蓮田市駒崎
果樹特産	な し	7	鴻巣市常光、神川町植竹、上里町長浜、加須市鴻莖、 加須市上種足、春日部市内牧、白岡市下大崎
	茶	4	所沢市下富、狭山市南入曽、入間市根岸、 日高市森戸新田
野 菜	トマト	7	川越市南田島、川島町上大屋敷、本庄市仁手、 上里町勅使河原、深谷市普濟寺、加須市栄、 越谷市東町
	な す	3	本庄市児玉町小平、熊谷市小江川、杉戸町大塚
	きゅうり	7	川越市大中居、川島町上大屋敷、本庄市田中、 熊谷市樋春、深谷市高畑、深谷市下手計、加須市大室
	ブロッコリー	3	本庄市田中、深谷市針ヶ谷、吉川市川藤
	ね ぎ	5	さいたま市岩槻区大野島、本庄市田中、熊谷市飯塚、 深谷市下手計、越谷市中島
	さといも	3	川越市中福、所沢市下富、狭山市堀兼
	ほうれんそう	3	川越市中福、狭山市堀兼、深谷市上手計
	いちご	5	吉見町江和井、本庄市台町、加須市本郷、 春日部市内牧、久喜市菖蒲町菖蒲
計	80		

(注) 水稻（早植）：5月中旬までの移植、水稻（普通植）：5月下旬以降の移植。

エ フェロモントラップ等調査

対象作物	対象害虫名	箇所数	設置場所
水 稲	ニカメイガ	3	吉見町西吉見、加須市麦倉、幸手市神扇
	フタオビコヤガ	2	熊谷市中曽根、加須市戸室
な し	ナシヒメシンクイ	5	飯能市双柳、鴻巣市常光、上里町長浜、加須市鴻荃、春日部市内牧
	果樹カメムシ類	1	寄居町鉢形
茶	チャハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノコカクモンハマキ	2	所沢市下富、入間市根岸
	チャノホソガ	2	所沢市下富、入間市根岸
野 菜	オオタバコガ	5	本庄市児玉町小平、深谷市針ヶ谷、加須市間口、越谷市中島、杉戸町大塚
	ハスモンヨトウ	3	熊谷市樋春、深谷市針ヶ谷、久喜市菖蒲町菖蒲
	コナガ	1	深谷市新戒
	シロイチモジヨトウ	3	深谷市新戒、越谷市中島、杉戸町大塚
計		29	

(3) 令和6年度の主な病害虫の発生とその防除対策

ア 主要病害虫の発生と防除対策の概要

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	葉いもち	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は7月に最大となった。発生量は平年並だった。	5～7月のいもち病感染好適日は過去10年で最も少なかったが、一部感受性品種で発生が見られた。この作型では平年の発生量が比較的小さいため、発生量は平年並となった。	抵抗性品種への転換が進みつつある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	穂いもち	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い7月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並だった。	8月の降水量は多かったが、顕著な高温でだったため、軽微な発生にとどまった。この作型では平年の発生量が少ないため、発生量は平年並となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	紋枯病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：やや少	平年より遅い7月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並だった。	7～8月の気温がかなり高く、8月の降水量も多かったが、7月の降水量が少なかったため、発生量は平年並にとどまった。	多窒素栽培を避けるなどの耕種的防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ばか苗病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。JA米では種子更新が徹底されている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	もみ枯細菌病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：並	平年並の8月第2半旬に初発生を確認した。	本作型では過去10年で昨年のみ軽微な発生が見られただけのため、本年も昨年並の発生量だったが、平年比は多となった。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	縞葉枯病	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年より多かった。	ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率は過去10年で最も低かったが、麦ほ場における生息密度が過去10年で最も高かったため、平年より早く多い発生となった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。抵抗性品種への転換が進みつつある一方で、感受性品種ではウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	稲こうじ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	※ごま葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	本作型では過去10年で昨年のみ一部地域で極めて軽微な発生が見られただけのため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	※白葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ニカメイガ	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：少	平年より早い6月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。県東部では予察灯誘殺数が平年より多く、本田での発生量もやや多い結果となった。	この作型では秋耕いが定着しているため、水田内の越冬場所が減少しており、近年少発生傾向であったが、品種構成の変化(稈の太い品種の作付)などにより、世代を重ねることに増加した。特にチョウ目害虫対象の箱施薬を実施していない地域において、発生が増加した。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	セジロウンカ	平年：早 前年：並	平年：やや多 前年：多	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	気象予報に基づく飛来予測では6月23日が初予測日であったが、予察灯への初誘殺や本田の初発生時期を考慮すると、実際にはそれ以前から飛来して本田定着したと推察される。予察灯の誘殺数は6地点中4地点が平年の1.5倍以上(最大7.7倍)で、本田でも平年よりやや多い発生となった。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測通知が来た際に、飛来予測日数の動向を発表し、注意喚起した。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	トビロウンカ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	本田での発生は確認されなかった。	予察灯への誘殺は若干見られたものの、1回当たりの飛来数が少なかったため、本田定着には至らなかったと考えられる。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測通知が来た際に、飛来予測日数の動向を発表し、注意喚起した。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ヒメトビウンカ	平年：やや早 前年：やや遅	平年：やや多 前年：多	平年よりやや早い6月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で最も高かったが、7月～9月の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや多にとどまった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	ツマグロヨコバイ	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い6月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	予察灯誘殺数も平年より少なかった。原因は定かではないが、在来種のため、夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	斑点米カメムシ類	平年：早 前年：やや遅	平年：多 前年：多	平年より早い6月第1半旬に初発生を確認し、発生量は8月に最大となった。発生量は平年より多かった。	昨年のイネカメムシの発生量が多かったこと、6月下旬から早期栽培地帯でのイネカメムシ飛来報告が相次いだことから、イネカメムシの越冬量が多かったと推察される。また、予察灯への誘殺もイネカメムシ及びホソハリカメムシ・ミナミアオカメムシ等が非常に多く、本田での発生量も平年比多となった。	イネカメムシ防除対策資料、斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果及び注意報を発表し、防除を呼びかけた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イチモンジセセリ	平年：やや遅 前年：早	平年：やや少 前年：—	平年よりやや遅い6月第3半旬に初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。	夏期の長期にわたる異常高温により発生が抑制され(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)、発生量はやや少にとどまった。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	フタオビコヤガ	平年：早 前年：並	平年：並 前年：—	平年より早い5月第6半旬に初発生を確認したが、その後発生は見られなかった。	フェロモントラップの誘殺数は年々減少傾向にあり、ほ場での発生も減少しているため、少発生が平年並となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	コブノメイガ	平年：遅 前年：—	平年：並 前年：—	平年よりかなり遅い9月第3半旬に初発生を確認したが、その後すぐ収穫された。	この作型の晩生種で、周りが黄化した頃に若干食害葉が見られることがあるが、被害の絶対量は極めて少ない。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	イネミズゾウムシ	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	平年より遅い5月第4半旬に初発生を確認し、発生量は5月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	本虫の多発地は4月下旬移植地域が主体で、通常は移植後すぐに発生が確認されるが、1月～4月が高温に経過したため、越冬世代成虫の活動開始時期が水稲移植前に早まり、本田での確認が第1世代成虫になった可能性が考えられる。発生量は、年々減少している。	越冬場所(森林、堤防沿い)に近接する常発地帯では、育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	スクミリンゴガイ	平年：— 前年：—	平年：やや少 前年：—	本作型では、地域による被害の多少の差が大きかったが、発生量は平年より少なく、前年並かやや多かった。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。常発地の防除が徹底されて、発生量は平年よりやや少ないが、暖冬が続いているため、越冬個体は徐々に増加しつつある。	耕種防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (早植) 5月中旬までの移植	※イネドロオイムシ	平年：並 前年：早	平年：並 前年：少	一部ほ場で散発程度の発生が確認された。	本虫は寒冷地型であり、本県では4月下旬移植の一部地域でわずかに発生が見られる程度である。	常発地域が非常に限定的であり、当該地域では育苗箱施用薬剤の使用が基本技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	葉いもち	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より遅い7月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	5～7月のいもち病感染好適日は過去10年で最も少なく、夏期の異常高温により7月17日を最後に9月24日まで感染好適日が出現しなかった。このため、常発地以外での発生はほとんど見られず平年比やや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっているが、一部に常発地がある。常発地では、育苗箱施用薬剤の利用が一般技術となっている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	穂いもち	平年：早 前年：やや早	平年：やや少 前年：少	平年より早い8月第5半旬に初発生を確認し、発生面積は9月第1半旬が最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	葉いもちの発生量がやや少なく、7月18日～9月23日の間感染好適日の出現がなかったため、穂いもちの発生量もやや少となった。	感染好適日の発生状況を15日おきに発表し、必要に応じた葉いもちの防除を周知することにより、穂いもちの予防につなげた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	紋枯病	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	平年より遅い8月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は9月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	8月～9月の気温が高く、8月は降水量も多かったが、異常高温で菌の生育適温を超える時間帯が長く、9月の降水量がかなり少なかったため、多発には至らなかった。	多室栽培を避けるなどの耕種防除、薬剤による防除を組み合わせ実施している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ばか苗病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	温湯消毒の実施と箱育苗処理剤の励行を実施。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	もみ枯細菌病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第3半旬に初発生を確認した。発生量は平年並であった。	本作型の出穂期である8月の降水量は多かったが、散発1か所のみにとどまった。初発が遅かったことから、夏期の異常高温で発生が抑制された可能性が否定できない。平年の発生量が少ないため、散発1か所が平年並となる。	種子更新と種子消毒の徹底について情報発信を実施した。また普及している箱施用薬剤の中には、本病に有効な薬剤がある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	縞葉枯病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年よりやや少なかった。	本作型では、一部地域を除きほぼ抵抗性品種となっている。また、ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒率は過去10年で最も低く、ヒメトビウンカの本田での発生量もやや少なかったため、本病の発生もやや少となった。	ほぼ抵抗性品種となっている。保毒率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、感受性品種を付けている場合は防除に取り組むよう呼びかけている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	稲こうじ病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	本作型の穂ばらみ期～出穂期の降水量は多かったが、異常高温が続いたため、発生が抑制された可能性が否定できない。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	※ごま葉枯病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	※白葉枯病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	過去10年で1年のみ散発程度の発生だったため、無発生が平年並となる。	本病を対象とした防除はほとんど実施されていないが、普及している箱施用剤には細菌病に有効なものがある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ニカメイガ	平年：遅 前年：—	平年：並 前年：—	平年より遅い9月第1半旬に初発生を確認したものの、発生は散発にとどまった。本年は予察灯誘殺数が平年より多かったが、本田での発生量は平年並であった。	本作型では米麦二毛作が多く、米収穫後すぐに耕耘するため、平年の発生量が非常に少ない。散発1か所で平年並の発生となる。	絶対量としてはそれほど多くなく、減収につながる被害とはなっていないため、他の害虫との同時防除で対応している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	セジロウンカ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月が最大となった。発生量は、平年並だった。	早期・早植栽培地帯での予察灯の誘殺数は平年よりかなり多かったが、普通期栽培地帯では予察灯の誘殺数が平年並だった。飛来予測は7月11日が最後だったため、本作型の地域では平年並みの発生となった。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測通知が来た際に、飛来予測日数の動向を発表し、注意喚起した。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	トビロウンカ	平年：やや早 前年：一	平年：並 前年：一	平年よりもやや早い9月第2半旬に1か所で散発程度ではあるが、本田での発生が確認された。また、予察灯への誘殺は県内複数地域で確認された。	飛来予測日数は昨年より多かったが、予察灯への誘殺は昨年より少なかった。1回当たりの飛来数が少なかったため、ほとんどの地域で本田定着には至らなかったと考えられる。平年の発生量が少ないため、散発1か所が平年並となる。	セジロウンカ・トビロウンカの飛来予測通知が来た際に、飛来予測日数の動向を発表し、注意喚起した。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ヒメトビウンカ	平年：遅 前年：並	平年：やや少 前年：並	平年より遅い6月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は9月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	5月に調査した麦ほ場での成幼虫密度は過去10年で最も高かったが、7月～9月の異常高温により発育が抑制され(発育上限29℃、発育停止40℃)、発生量はやや少にとどまった。	保毒虫率及び麦ほ場の生息密度の調査結果を発表し、防除に取り組むよう呼びかけている。ウンカ類に対する育苗箱施用薬剤の使用を徹底している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	ツマグロヨコバイ	平年：遅 前年：やや遅	平年：並 前年：並	平年より遅い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月に最大となった。発生量は平年並であった。	予察灯誘殺数は平年より少なかったが、県東部では平年より多く、その地域が中発生となったため、全体の発生量が平年並となった。	ヒメトビウンカに対する育苗箱施用薬剤の使用徹底により、ヨコバイ類への防除も同時に行われている。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	斑点米カメムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：並	平年より遅い7月第1半旬に初発生を確認し、発生面積は8月にいったん減少したものの、9月に発生面積が増加し最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	昨年のイネカメムシの発生量が多かったこと、6月下旬から早期栽培地帯でのイネカメムシ飛来報告が相次いだことから、イネカメムシの越冬量が多かったと推察される。また、予察灯への誘殺もイネカメムシ及びホソハリカメムシ・ミナミアオカメムシ等が非常に多く、本田での発生量も平年比多となった。	イネカメムシ防除対策資料、斑点米カメムシ類畦畔・雑草地発生調査結果及び注意報を発表し、防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イチモンジセセリ	平年：並 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より遅い8月第6半旬に初発生を確認し、その後も発生は確認されたが、一部地域での散発程度の発生に留まった。発生量は平年よりやや少なかった。	夏期の長期にわたる異常高温により発生が抑制され(本虫は30℃以上で若齢幼虫の生育遅延や老齢幼虫の死滅が報告されている)、発生量はやや少にとどまった。	生育予測システムを活用して第2世代幼虫孵化最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	フタオビコヤガ	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	平年の発生量が非常に少ないため、無発生が平年並となる。	生育予測システムを活用して第2世代成虫最盛期を発表し、適期防除を呼びかけた。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	コブノメイガ	平年：早 前年：一	平年：並 前年：一	平年より早い7月第6半旬に1か所で散発程度ではあるが、本田での発生が確認された。	平年の発生量が少ないため、散発1か所で平年並の発生となる。	減収につながる被害とはなっていないため他の害虫との同時防除で対応している。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	イネミズゾウムシ	平年：やや早 前年：遅	平年：並 前年：一	平年よりやや早い6月第3半旬に一部の地域で初発生を確認したが、散発程度で、その後発生は見られなかった。	従来からこの作型ではあまり発生が見られない。散発1か所で平年並の発生となる。	この作型ではあまり発生が見られないため、特に防除はしていない。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	スクミリンゴガイ	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生量は平年並だったが、被害面積は前年度と比較して大きく増加していたほか、ごく一部に壊滅的被害を受けたほ場が見られた。	本県では、冬季の低温が本種の越冬を阻害するため、常発地は限られている。一部の地域で、一昨年甚大な被害を受けたため昨年は休耕していたほ場での作付けが復活したため、中程度の被害のほ場が拡大し、発生量は平年並となった。	耕種防除が中心であるが、常発地帯では薬剤防除も実施されている。薬剤防除に助成する地域防除協議会もある。
水稲 (普通植) 5月下旬以降の移植	※イネドロオイムシ	平年：一 前年：一	平年：一 前年：一	発生は確認されなかった。	過去10年無発生のため、無発生が平年並となる。	特に防除はしていないが、普及している箱施用剤には、コウチュウ目にも有効なものもある。
麦	黒さび病	平年：一 前年：一	平年：一 前年：一	発生は確認されなかった。	一	一
麦	赤さび病	平年：遅 前年：やや遅	平年：並 前年：並	平年より遅い4月第6半旬に初発を確認し、5月第2～第3半旬に複数の地点で確認されたため、発生面積は5月が最大となった。発生量は平年並だった。	4月中旬～5月上旬が温暖多湿に経過し、感染しやすい条件が継続したが、赤かび病の防除が徹底されたため、平年並の発生にとどまった。	赤かび病との同時防除可能な薬剤の選択。
麦	黄さび病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	一	一
麦	小さび病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	一	一
麦	うどんこ病	平年：やや遅 前年：やや早	平年：やや少 前年：少	平年よりやや遅い4月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	4月の下旬～5月の月上旬に1週間ごとに日15mm以上の強い降雨があったため、発生が抑制された。	赤かび病の防除で同時防除されている。
麦	赤かび病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い4月第6半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は平年よりかなり多く(平年の730倍)、県内全域で発生しており、一部ほ場では甚大な被害が確認された。	4月中下旬に温暖多湿条件が継続し、アメダスデータから算出される赤かび病子のう胞子飛散好適日と麦類(特に小麦)の開花期が完全に一致した。4月30日、5月7日には多発生好適日も出現し、発生を助長した。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。防除情報及び注意報を発表し、追加防除を呼びかけた。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
麦	黒穂病類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	黒節病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い2月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は5月に最大となった。発生量は過去10年で最も多かった(平年の158倍)。	2月中旬を除き、1月下旬～4月上旬まで多雨傾向が継続し、1月下旬、2月中旬、4月上旬は高温だったため、発生を助長した。	種子更新、種子消毒を実施している。
麦	オオムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	近年、抵抗性品種や「彩の星」の導入により発生が極少となっている。
麦	コムギ縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	近年、抵抗性品種「さとのそら」の導入より発生が極少となっている。
麦	オオムギ斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
麦	アブラムシ類	平年：早 前年：遅	平年：やや少 前年：多	平年より早い12月第6半旬に初発生を確認し、一時発生がおさまったものの、2月から再発生し、発生面積は4月に最大となった。発生量は平年よりやや少なかった。	暖冬傾向であったため、初発は平年より早まったものの、再発生時期である3月下旬にまとまった降雨があったため、発生が抑制された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
麦	ムギダニ	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より遅い3月第6半旬に、散発程度の初発生を確認した。発生量は平年よりやや少なかった。	第1世代虫が発生する2月上旬及び第2世代虫が発生する3月下旬にまとまった降雨があったため、一部地域で散発程度の発生にとどまった。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
麦	シロトビムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
かんしょ	つる割病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	基腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	苗の消毒、土壌消毒を実施している。
かんしょ	イモキバガ (イモコガ)	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	ナカジロシタバ	平年：早 前年：早	平年：多 前年：やや多	平年より早い9月第6半旬に初発生を確認された。その後も継続して発生が見られたため、平年よりも発生量は多かった。適切な防除により被害はそれほど拡大しなかった。	9～10月の高温で発生が助長された。また、本虫はハスモンヨトウよりも高温に適応しているようで、本年度のかんしょにおける食葉性チョウ目の発生は、ほとんどが本種であった。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：－	9月第3半旬に初発が確認されたが、防除により、ほとんど被害は出なかった。	本害虫は極端な高温に対して弱く、本年度の6～9月の気温は本種にとってマイナス要因として働いていた可能性が高い。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
かんしょ	食葉性チョウ目幼虫	平年：－ 前年：早	平年：並 前年：－	5月第6半旬に初発が確認されたが、防除によりほとんど被害は出なかった。	本年度の食葉性チョウ目幼虫の発生はほとんどがナカジロシタバであったため、その他のチョウ目幼虫はほとんど問題にならなかった。	ハスモンヨトウ等を対象とした防除により防除されている。
大豆	紫斑病	平年：並 前年：早	平年：多 前年：多	収穫期の子実調査で、県全域における発生が確認された。また、平年よりもかなり多い発生が確認された。	8月が多雨傾向で経過し、特に8月下旬はまとまった雨が降ったため、9月に入っても土壌水分が高く、莢伸長期の感染を助長した。	奨励品種が紫斑病に強い「里のほほえみ」に切り替わった。種子消毒、無人ヘリによる一斉防除を実施している。
大豆	立枯性病害	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：並	一部地域で立枯病と黒根腐病の2種類の病害について散発程度の発生が確認された。	種子消毒の不徹底により、一部地域にて発生した。	種子消毒を実施している。
大豆	べと病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：やや多	平年より早い8月第3半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年よりやや多かった。	主力品種が感受性の「里のほほえみ」や在来品種のため、発生が増加傾向にある。感染しやすい生育ステージである8月が多雨に経過したため、ほとんどのほ場で発生したが、夏期の異常高温で抑制され、平年比やや多にとどまった。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	葉焼病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い8月第4半旬に初発生を確認し、発生面積は10月に最大となった。発生量は過去10年で最も多かった(平年の11倍)。	8月の高温や雷雨により、発生が大きく助長された。	種子更新、ほ場内の残さ処理による耕種的防除を実施している。
大豆	ウイルス病	平年：遅 前年：並	平年：多 前年：多	収穫期の子実調査で、一部地域で褐斑粒の発生が確認された。生育期のモザイク葉は確認されなかった。	8月の多雨によりアブラムシ類の発生は確認できなかったが、褐斑粒が1か所であつた。発生(被害粒率1.4%)となった。平年の発生量が少ないため、少発生1か所で平年比多となる。	－
大豆	萎疫病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
大豆	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	8月の多雨により、発生が抑制された。平成30年以降は発生量が減少しているため、無発生でも平年比は少にならない。	は種時の薬剤処理と適期防除を実施している。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
大豆	コガネムシ類	平年：やや遅 前年：遅	平年：少 前年：多	平年よりやや遅い8月第2半旬に、一部地域で発生を確認したが、その後の発生は見られなかった。	発生量が少なかった原因は定かではないが、在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：並	平年：やや少 前年：少	平年より早い8月第1半旬以降に一部ほ場で散発程度の発生が見られた。	フェロモントラップでの誘殺数が近年減少傾向にあり、ほ場でもオオタバコガ、シロイチモジヨトウが優占し、本種は減少している。また、R6年は8月の多雨により天敵糸状菌が増加し幼虫密度の低減に期待できると考えられる。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	食葉性チョウ目幼虫	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い7月第4半旬から発生が確認され、発生面積は10月に最大となった。発生量は平年より多かった。	7月の高温少雨により播種が例年より早かったため、初発も早まった。オオタバコガ、シロイチモジヨトウのフェロモントラップ誘殺数は、9月～10月の高温少雨傾向により、9月第4半旬～10月第2半旬に平年より平年より大幅に増加し、ほ場での発生も助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が地域に定着している。空中散布による防除が地域に定着している。オオタバコガは注意報を発表し、防除を呼びかけた。
大豆	ダイズサヤタマバエ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	8月(特に下旬)の多雨によって発生が抑制された可能性がある。また、在来種のため夏期の長期にわたる異常高温が影響した可能性は否めない。	本害虫による被害は稀なため防除対策は実施していない。
大豆	マメシンクイガ	平年：早 前年：並	平年：並 前年：並	平年より早い9月第3半旬に、一部地域で被害葉が確認された。発生量は平年並であった。	大規模粗放栽培のほとんど防除を行っていない調査地点1か所が子実調査で基発生となったが、他の調査地点は少発生1か所のみで、平年並の発生となった。8月下旬のまとまった雨により、第1世代幼虫の発生が抑制されたが、9～10月の高温少雨により、第2世代幼虫の被害が	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	シロイチモジマダラメイガ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	収穫期の子実調査で、一部地域で被害が確認された。発生量は平年よりやや少なかった。	ほ場での発生は確認できなかったが、子実調査で少発生が1か所確認された。8月の多雨により第2～3世代幼虫の発生が抑制されたと考えられる。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	吸実性カメムシ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：並	平年よりかなり早い8月第2半旬に初発生を確認し、発生面積は11月に最大となった。発生量は平年より多かった。	近年、他種の寄生が減少する9月中旬から収穫期近くまで寄生するミナミアオカメムシが急速に増加し、9月～10月まで高温で推移したため、子実被害が助長された。	主産地では無人ヘリによる一斉防除が実施された。空中散布による防除が地域に定着している。
大豆	フタスジヒメハムシ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	黒斑病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	黒星病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：多	平年より遅い7月第1半旬に初発を確認したが、9月以降は発生が確認されなかった。発生量は平年並で前年より多かった。	前年の秋の発生量が少なかったため前年より発生が多くなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	赤星病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：少	平年より遅い5月第6半旬に初発を確認した。その後平年並で推移したが、前年より発生量は少なかった。	3月から5月上旬に降雨が多かったが、昨年の発生が多かったため前年より少ない結果となった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い7月第1半旬に初発を確認した。発生量は平年並であった。	前年の発生量が多かったため、前年と比べ少ないが、9月の少雨で発生が助長され平年並に発生した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	輪紋病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	シンクイムシ類	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：多	平年より早い5月第6半旬に初発を確認し、7月に発生が最大となった。発生量は平年よりやや多く、前年より多い結果になった。	越冬世代のフェロモントラップの誘殺数が多く、その後の発生量も多くなった。あまり見られない幼果での幼虫の被害も確認された。	フェロモントラップデータの公表、2回の注意報の発表をし、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
なし	ハマキムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	7月第1半旬に初発を確認したが、その後の発生は見られなかった。発生量は平年並となった。	夏季の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ハダニ類	平年：早 前年：遅	平年：多 前年：少	平年より早い5月第6半旬に初発を確認した。その後発生量は平年より多く推移した。	4月から9月にかけての高温と7月と9月の少雨により発生が助長され平年より多くなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	カイガラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
なし	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：少	平年より遅い4月第3半旬に初発を確認した。発生量は平年より少なかった。	3月・5月の多雨により発生が抑制され、平年より少ない発生になった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
なし	ニセナシサビダニ	平年：やや早 前年：遅	平年：並 前年：少	平年よりやや早い5月第4半旬に初発を確認した。平年並の発生量となった。	3月の高温が発生を早まった。前年の発生が多かったため、前年比は少なくなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
なし	果樹カメムシ類	平年：早 前年：一	平年：多 前年：一	平年より早い8月第1半旬に果実被害の発生を確認した。発生量は平年より多かった。	越冬調査時点で越冬密度が高く、予察灯やフェロモントラップの誘殺数も4月から多かった。全国的な発生が多かった。	フェロモントラップデータの公表、2回の注意報の発表を行い、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	炭そ病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：やや少	二番茶摘採以降、7月第1半旬から11月第1半旬にかけて発生が見られた。広い地域での発生が見られたものの、ほ場ごとの発生量は少なかったため、平年に比べやや少となった。	8月第1半旬から8月第6半旬の豪雨の影響により一時発生は増加したものの、9月の高温乾燥により発生は落ち着いた。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	もち病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	越冬菌密度が低く、適切に防除されているためと思われる。	一
茶	輪斑病	平年：遅 前年：一	平年：やや少 前年：一	10月第2半旬にごくわずかに発生が確認されたものの、発生地域も限定的でありそれ以降の確認もできなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	一
茶	チャノココクモンハマキ	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：やや多	フェロモントラップでの調査では、第1世代成虫の発生は平年よりも早かった。発生量は7月中旬以降減少し、昨年同様第2世代成虫の誘殺数は平年を大きく下回った。幼虫は、一番茶の摘採後にわずかに発生が見られたものの、7月上旬以降発生はほとんど確認できなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャハマキ	平年：早 前年：遅	平年：やや少 前年：少	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫、第1世代成虫の発生は平年よりも早かった。発生量は7月中旬以降減少し第2世代成虫は大きく下回った。幼虫は、茶園での発生は平年よりも早かった。8月第1半旬以降は発生量は減少し、その後も茶園での幼虫の発生はほとんど確認されなかった。	適切な防除が行われたのに加え、夏期の高温や8月の豪雨の影響や、一番茶・二番茶の摘採、その後の整枝作業により物理的に除去され個体数が減少したと思われる。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノホソガ	平年：遅 前年：一	平年：やや少 前年：一	フェロモントラップでの調査では、越冬世代成虫は平年よりも早かった。発生量は7月上旬以降減少した。また、例年では発生が確認できなかった第4世代にあたる成虫の誘殺まで確認された。幼虫は、夏期にわずかに茶園での発生が確認された。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。例年では発生が見られなかった第4世代の発生確認されたが、1年を通して気温が高かったためかと考えられる。	フェロモントラップデータを県のウェブサイトに掲載し、注意喚起と適期防除を呼びかけた。
茶	チャノミドリヒメヨコバイ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：多	平年よりかなり早い4月第3半旬から発生が確認されたうえ、7月第6半旬までは発生量が平年より多い状況が続いていた。その後8月以降は発生量が減少した。	7月の高温乾燥の影響のため、2番茶の摘採以降発生量が急激に増加した。しかし、8月中の豪雨や防除の影響で発生量が減少し、全体としては平年並の発生量となった。	発生予察情報や病害虫防除情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	カンザワハダニ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：並	2月第3半旬から発生は見られ、局地的に発生量が増加したものの、9月第1半旬以降発生が減少した。	局地的に発生量が増加したものの、深刈りにより、物理的に除去されたほか、9月以降の適切な防除により発生は抑えられ、平年並の発生となった。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	チャノキイロアザミウマ	平年：早 前年：遅	平年：並 前年：多	4月第2半旬から発生が見られる園が増えたが、その後発生量自体は大きく増加することはなかった。	4月の高温により平年よりも早く発生が見られたが、カンザワハダニとの同時防除等により発生は抑制された。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	ツマグロアオカシミカメ	平年：一 前年：一	平年：やや少 前年：一	発生は確認されなかった。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。また、本年の県内における発生は非常に局所的かつ小規模となっている。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	クワシロカイガラムシ	平年：一 前年：一	平年：やや少 前年：一	有効積算温度によるふ化予測では、第1世代幼虫のふ化最盛期は5月16日（平年より10日早い）、第2世代は7月10日（平年より12日早い）、第3世代は9月13日（平年より3日遅い）となった。	冬季に散布する防除薬剤の普及により発生量は減少している。	発生予察情報等の防除指導により、適期防除を実施した。
茶	ヨモギエダシャク	平年：早 前年：一	平年：並 前年：一	5月第6半旬及び9月第2半旬に局所的かつ少数の発生が確認されたものの、それ以外の発生は確認されなかった。	本県での発生は少なく、チャのハマキガ類と同時に適切な防除がされていると思われる。	一
茶	チャトゲコナジラミ	平年：早 前年：やや早	平年：並 前年：並	裾葉に定着していたが、チャの栽培上問題のない程度の発生にとどまっていた。	適切な防除が行われているため発生が抑えられている。	一
冬春トマト (長期一作)	疫病	平年：一 前年：一	平年：一 前年：一	発生は確認されなかった。	一	一
冬春トマト (長期一作)	灰色かび病	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	1月第2半旬に初発を確認したが、発生が少なく、収束も早かったため、発生量は平年よりやや少なくなった。	2月が高温だったことから、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生が抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト (長期一作)	葉かび病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	抵抗性品種の普及により発生は抑制されている。	抵抗性品種の導入とあわせ薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。
冬春トマト (長期一作)	青枯病	平年：一 前年：一	平年：並 前年：一	発生は確認されなかった。	一	抵抗性台木が利用されている。また、土壌消毒が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春トマト (長期一作)	黄化葉巻病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：少	平年より早い10月第1半旬に初発を確認したが発生量が多く、発生も継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	一部のほ場でウイルス媒介虫の侵入防止対策が不十分であったため、発生が増加した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。一部のほ場で耐病性品種が導入されている。
冬春トマト (長期一作)	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：やや多	平年より遅い1月第6半旬に初発を確認したが発生量が多く、発生も継続したため、発生量は平年よりも多くなった。	4～5月の降水量が多かった影響で、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト (長期一作)	萎ちよう病類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	抵抗性品種が導入されている。	土壌病害に共通した土壌消毒等の対策がとられている。
冬春トマト (長期一作)	黄化えそ病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	アザミウマ類の防除対策がとられている。
冬春トマト (長期一作)	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：－	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト (長期一作)	コナジラミ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	一部のほ場で侵入防止対策が不十分であった。また、2～4月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春トマト (長期一作)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：－	平年：並 前年：多	平年より早い1月第1半旬に初発を確認し、発生が継続したが、発生量が少なかったため、平年並となった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	トマトサビダニ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春トマト (長期一作)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	11月第6半旬に初発を確認したが、発生量は少なく、すぐに収束したため、発生量は平年並だった。	11月～12月の高温の影響で発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春トマト (長期一作)	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	12月第3半旬に初発を確認したが、発生量は少なく、すぐに収束したため、発生量は平年並だった。	11月～12月の高温の影響で発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	うどんこ病	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：多	平年より遅い9月第3半旬に初発を確認したが発生量が増加したため、発生量は平年よりやや多くなった。	着果負担の影響が10月に大きくなったところに天候不順の影響があり、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋なす	すすかび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
夏秋なす	褐紋病	平年：並 前年：遅	平年：多 前年：多	平年並の7月第4半旬に初発を確認し、その後発生量が増加したため、発生量は平年より多くなった。	8月の多雨により、発生が助長された。	－
夏秋なす	褐色腐敗病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年よりも遅い10月第3半旬に初発が確認されたが、発生は少なく、すぐに終息したため、発生量は平年並となった。	－	－
夏秋なす	半身萎ちよう病	平年：早 前年：やや遅	平年：多 前年：多	平年より早い6月第1半旬に初発を確認し、一部のほ場で発生が多くなった。その後も発生が継続したため、発生量は平年より多くなった。	一部のほ場で連作により発生が増加した。	抵抗性台木が利用されている。
夏秋なす	青枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	抵抗性台木が利用されている。
夏秋なす	アザミウマ類	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：やや少	平年より早い4月第6半旬に初発を確認し、その後も発生が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	6～10月の高温により、発生が助長された。	天敵への影響や薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	オオタバコガ	平年：やや早 前年：遅	平年：多 前年：多	平年よりやや早い5月第6半旬に初発を確認し、その後継続的に発生が続いたため、発生量は平年より多くなった。	6～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：－	前年より早い6月第1半旬に初発を確認したが、発生は増えず、発生量は平年並となった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	－
夏秋なす	ハモグリバエ類	平年：遅 前年：－	平年：多 前年：－	前年より遅い9月第3半旬に初発を確認したが、発生は多く、発生量は平年より多くなった。	－	－
夏秋なす	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：少	平年より早い4月第6半旬に初発を確認し、たが、その後発生は増えなかったため、発生量は平年並となった。	4月の高温により発生時期が早まった。	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
夏秋なす	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：少	平年より遅い5月第6半旬に初発を確認した。その後、発生量は多くなかったため、発生量は平年並になった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋なす	ホコリダニ類	平年：遅 前年：並	平年：多 前年：多	平年より遅い9月第6半旬に初発を確認した。10月に発生量が急増したため、発生量は平年多くなった。	全体的には防除対策が十分行われており、発生は収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場にとどまった。	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	べと病	平年：並 前年：早	平年：並 前年：多	平年並の9月第3半旬に初発を確認した。その後、発生量は継続したが増加はしなかったため、発生量は平年並となった。	10月は降水量が多くハウス内湿度が上昇し、発生が助長された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	炭疽病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	うどんこ病	平年：遅 前年：早	平年：多 前年：多	平年より遅い9月第6半旬に初発を確認し、発生が多かったため、発生量は平年より多くなった。	—	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	斑点細菌病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	モザイク病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	灰色かび病	平年：— 前年：—	平年：多 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—
夏秋きゅうり (抑制栽培)	褐斑病	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：多	平年より早い8月第6半旬に初発を確認し、発生が続いたため、発生量は平年よりやや多くなった。	10月は降水量が多くハウス内湿度が上昇し、発生が助長された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	菌核病	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	作付前の太陽熱消毒等により伝染源である菌核の死滅が図られている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	黄化えそ病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：やや多	平年並の9月第3半旬に初発を確認し、その後発生は継続し、11月に増加したため、発生量は平年より多くなった。	9～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、発生が助長された。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	退緑黄化病	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い8月第6半旬に初発を確認し、その後高い水準で発生量が推移したため、発生量は平年よりも多くなった。	8～11月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、一度感染株が発生したハウス内では継続的に感染が継続した。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アザミウマ類	平年：やや早 前年：並	平年：多 前年：並	平年よりやや早い9月第3半旬に初発を確認し、その後発生は継続し、10月に増加したため、発生量は平年より多くなった。	9～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	コナジラミ類	平年：遅 前年：遅	平年：多 前年：多	平年より遅い8月第6半旬に初発を確認し、発生量は増加していったため、発生量は平年より多くなった。	8～11月の高温により、発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：並	平年：多 前年：多	平年より早い9月第3半旬に初発を確認し、発生が多く続いたため、発生量は平年より多くなった。	9～11月の高温により発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハダニ類	平年：— 前年：—	平年：多 前年：—	発生は確認されなかった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	アブラムシ類	平年：— 前年：—	平年：やや少 前年：—	発生は確認されなかった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	ハスモンヨトウ	平年：早 前年：早	平年：並 前年：—	平年より早い9月第3半旬に初発を確認したが、その後発生が落ち着いたため、発生量は平年並となった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に防除が行われ、発生は一時的なものとなった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
夏秋きゅうり (抑制栽培)	食葉性チヨウ目幼虫	平年：— 前年：—	平年：並 前年：—	発生は確認されなかった。	—	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	べと病	平年：遅 前年：遅	平年：やや少 前年：多	平年より遅い4月第2半旬に初発を確認したが、その後発生量の少ない状態が継続したため、発生量は平年よりやや少なくなった。	2～5月の高温の影響で、ハウス内湿度が上がりにくくなり発生量の少ない状態が継続した。	抵抗性品種の導入と、施設内の湿度管理対策として循環扇の導入が図られている。また、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	炭疽病	平年：— 前年：—	平年：— 前年：—	発生は確認されなかった。	—	—

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (促成栽培)	うどんこ病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い12月第6半旬に初発を確認したが、発生量はそれほど多くなかったため、発生量は平年並となった。	一部定植時期の早いハウスで成り疲れして発生したものの、適正な湿度管理や適期防除が行われ、発生が抑制された。	抵抗性品種の導入と、薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	斑点細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	モザイク病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	褐斑病	平年：早 前年：－	平年：並 前年：多	平年より早い12月第6半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	－	抵抗性品種が導入されている。
冬春きゅうり (促成栽培)	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	作付後の太陽熱利用等による土壌消毒を行っている。
冬春きゅうり (促成栽培)	黄化えそ病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第3半旬に初発を確認した。発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	一部ハウスで発生が確認されたが、発生確認後に感染株の抜き取りが行われ、発生は一時的なものとなった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	退緑黄化病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：多	平年より遅い4月第3半旬に初発を確認したが、発生が確認されたほ場は一部であったため、発生量は平年並となった。	3月の高温によりウイルス媒介虫が増加し、一度感染株が発生したハウス内では継続的に感染が継続したものの、防除圧の高いハウスでは発生しなかった。	ウイルス媒介虫の侵入防止対策や発生株の除去などの総合防除が行われている。
冬春きゅうり (促成栽培)	アザミウマ類	平年：遅 前年：早	平年：やや多 前年：多	平年より遅い4月第2半旬に初発を確認したが、その後発生量の多い状態が継続したため、発生量は平年よりやや多くなった。	4月の高温によりハウスへの飛込が増えた。	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	コナジラミ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：少	発生は確認されなかった。	－	薬剤抵抗性を考慮した定期的な薬剤散布が実施されている。また、施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハモグリバエ類	平年：早 前年：早	平年：多 前年：多	平年より早い1月第6半旬に初発を確認し発生量は多い状態を維持したため、発生量は平年より多くなった。	2～5月の高温によりハウスへの飛込が増え、収穫期後半に防除圧が低下した一部のほ場で発生が助長された。	施設の側窓や天窓に防虫ネットを張り侵入を防止している。
冬春きゅうり (促成栽培)	ハダニ類	平年：－ 前年：早	平年：やや少 前年：－	4月第3半旬に初発を確認したが、すぐに終息し、発生量は平年よりやや少なくなった。	－	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (促成栽培)	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	食葉性チョウ目幼虫	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春きゅうり (促成栽培)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	黒腐病	平年：早 前年：－	平年：多 前年：－	平年より早い10月第6半旬に初発を確認し発生量は多い状態を維持したため、発生量は平年より多くなった。	10月の天候不順が発生を助長した。	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	べと病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	育苗時からの防除対策が始動されている。
ブロッコリー	軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	花蕾腐敗病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	黒斑細菌病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	細菌病共通の対策として薬剤散布が行われている。
ブロッコリー	黒すす病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い11月第3半旬に初発を確認したがすぐに終息したため、発生量は平年並となった。	10～11月の多雨により発生が抑制された。	育苗時からの防除対策が始動されている。
ブロッコリー	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：少	平年より遅い10月第3半旬に初発を確認し、発生量は平年よりやや多かった。	10月の高温の影響で発生が助長された。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。同時防除で対応している。
ブロッコリー	コナガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平年：遅 前年：並	平年：並 前年：少	平年より遅い9月第6半旬に初発を確認し、発生量は平年並だった。	定植後はしばらく定植時に処理した薬剤による防除効果が続いていたが、9月の高温の影響で発生が助長された。	育苗～定植時のかん注処理剤が利用されている。フェロモントラップによる発生状況を参考に、薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	オオタバコガ	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	7月～10月の高温により発生が助長された。フェロモントラップの誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
ブロッコリー	ヨトウガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	ハイマダラノメイガ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
ブロッコリー	シロイチモジヨトウ	平年：遅 前年：遅	平年：やや多 前年：少	平年より遅い10月第1半旬に初発を確認し、発生量は平年よりもやや多かった。	7月～10月に高温により発生が助長された。フェロモントラップの誘殺数も平年より多かった。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。8月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	さび病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：並	平年より遅い5月第3半旬に初発を確認したがその後増えなかったため、発生量は平年並となった。	5月の多雨が発生を助長した。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	黒斑病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い5月第6半旬に初発を確認し、発生量は平年並となった。	梅雨や秋雨により発生が助長された。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	べと病	平年：早 前年：早	平年：並 前年：並	平年より早い5月第6半旬に初発を確認したが、その後は発生は確認されなかった。	梅雨の影響で一部地域で発生が見られた。	他の病害との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	軟腐病	平年：早 前年：並	平年：並 前年：少	平年より早い8月第1半旬に初発を確認したが発生は続かなかつたため、発生量は平年並となった。	8～9月の高温が発生を助長した。	排水対策等の耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	小菌核腐敗病	平年：遅 前年：－	平年：並 前年：－	平年より遅い12月第3半旬に初発を確認した。発生は一部地域のみであったため、発生量は平年並であった。	－	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
秋冬ねぎ	白絹病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種の防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	黒腐菌核病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	土壌消毒と併せ、耕種の防除や薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
秋冬ねぎ	シロイチモジヨトウ	平年：早 前年：早	平年：やや多 前年：少	平年より早い5月第6半旬に初発を確認したがその後も継続して発生が確認されたため、発生量は平年より多かった。	5月～11月の高温により発生が助長され、12月まで発生が確認された。フェロモントラップ誘殺数も平年より多かった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。8月に注意報を発表し注意喚起と適期防除を呼び掛けた。
秋冬ねぎ	アブラムシ類	平年：早 前年：遅	平年：やや少 前年：並	平年より早い5月第4半旬に初発を確認したがその後は収まったため、発生量は平年よりもやや少であった。	5月の高温で発生が助長された。	他の害虫との同時防除で対応している。
秋冬ねぎ	ネギハモグリバエ	平年：早 前年：やや遅	平年：並 前年：少	平年よりも早い5月第6半旬に初発を確認し、継続して発生が確認されたが発生量は多くなかったため、平年並だった。	6月～10月の高温により発生が助長された。B系統の発生はそれほど多くなかった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギアザミウマ	平年：やや早 前年：やや遅	平年：並 前年：少	平年よりやや早い4月第6半旬に初発を確認し、栽培期間を通じて継続して発生が見られた。発生量は平年並だった。	一年を通して高温で推移したため、発生が早く、長く続いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
秋冬ねぎ	ネギコガ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	汚斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
さといも	疫病	平年：早 前年：－	平年：並 前年：－	平年より早い9月第1半旬に初発が確認されたが、発生は限定的で増えなかった。	－	県内主要産地での防除に対する意識が高く、適期防除が行われ、発生は抑制された。ドローンでの薬剤散布が行われるなど防除が徹底された。
さといも	アブラムシ類	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：多	平年より遅い6月第3半旬に初発が確認され、10月まで発生が見られたが、発生量は増えなかったため、平年並となった。	5月からの高温で発生が促進された。	疫病防除のため、薬剤散布回数が増加した。それに伴い、殺虫剤を散布する機会も増加した。
さといも	ハダニ類	平年：－ 前年：やや遅	平年：並 前年：－	7月第1半旬に初発が確認されたが、その後発生は見られなかった。	－	－
さといも	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	9月第3半旬に初発が確認されたが、発生圃場は限定的で、その後発生は見られなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	べと病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	立枯病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	播種時の粒剤施用をはじめ薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
冬春ほうれんそう	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長されたが、適期防除により発生は抑制された。	フェロモントラップによる発生状況を参考に薬剤散布が実施されている。
冬春ほうれんそう	ケナガコナダニ	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
冬春ほうれんそう	シロオビノメイガ	平年：早 前年：早	平年：多 前年：－	平年より早い10月第3半旬に初発を確認し、発生量は多く、11月まで発生は続いたため、発生量は平年より多かった。	9月～11月にかけて気温が高く発生が助長された。	薬剤抵抗性を考慮した防除が実施されている。
いちご (育苗期)	灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生要因の解析	防除の概要
いちご (育苗期)	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご (育苗期)	萎黄病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	雨よけ施設での育苗と併せ、灌水方法の工夫等、耕種的対策がとられている。
いちご (育苗期)	輪斑病	平年：並 前年：－	平年：並 前年：－	平年並6月第6半旬に初発を確認したが、発生量圃場は限定的であったため、発生量は平年並だった。	－	－
いちご (育苗期)	ハスモンヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (育苗期)	アザミウマ類	平年：－ 前年：遅	平年：－ 前年：－	6月第3半旬に初発を確認したが、その後の発生は確認されなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	－
いちご (育苗期)	アブラムシ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：やや少	平年より早い5月第1半旬に初発を確認したが、発生量は平年並となった。	3～4月の気温が高く、5月からの発生が見られたが、薬剤防除が行われ、発生は抑制された。	他の害虫との同時防除で対応している。
いちご (育苗期)	ハダニ類	平年：早 前年：やや遅	平年：やや多 前年：やや少	平年より早い5月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的な発生が確認され、発生量は平年よりやや多かった。	3～4月の気温が高く、5月からの発生が見られ、その後の高温で8月まで発生が続いた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (育苗期)	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：－	7月第3半旬に初発を確認したが、その後の発生は見られなかった。	適期防除が行われ、発生は抑制された。	－
いちご (育苗期)	コナジラミ類	平年：早 前年：早	平年：並 前年：－	前年より早い5月第2半旬に初発を確認したが、その後は確認されず、発生量は平年並となった。	適切な防除が行われ一次的な発生にとどまった。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	灰色かび病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より遅い1月第3半旬に初発を確認した。その後の発生は少なく、発生量は平年よりやや少となった。	12月～2月の少雨の影響で発生が抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	うどんこ病	平年：遅 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より遅い1月第3半旬に初発を確認したが、すぐに収束したため、発生量は平年よりやや少なかった。	育苗期の6～8月の高温が発生を抑制し、定植後の発生が抑えられた。適正な肥培管理や適期防除が行われたこと、12月～2月の少雨の影響で発生が抑制された。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	炭そ病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：－	発生は確認されなかった。	－	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	萎黄病	平年：遅 前年：遅	平年：並 前年：－	平年より遅い1月第3半旬に初発を確認したが、すぐに収束した。発生量は平年並だった。	早期抜き取りや適期防除が行われたため、発生は一時的なものとなった。	耕種的防除や薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	輪斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (生育・収穫期)	ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：少	平年並の10月第1半旬に初発を確認したが発生量は多くなかったために、発生量は平年比やや少となった。	10～11月の高温の影響により、側窓や出入口を換気していたことから、飛び込みによる発生が見られた。	ハウス開口部のネット使用により成虫の飛び込みを抑え、発生動向を見ながら薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アザミウマ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：少	平年より早い11月第3半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認されたが、発生量はやや少となった。	9月～12月にかけて高温で推移したため、一部ほ場で飛び込みによる発生が確認され、圃場に定着した後は防除が難しくなった。	ハウス開口部の赤色ネット使用により野外からの飛び込みを抑える耕種的防除と薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	アブラムシ類	平年：早 前年：並	平年：多 前年：少	平年より早い10月第1半旬に初発を確認し、その後も継続的に発生が確認された。3月第3半旬から発生が増え、4月の発生量は平年より多くなった。	9月～2月まで気温が平年より高く推移したため、初発後も継続的に発生した。3月下旬の気温が平年よりかなり高かったため、野外からの飛び込みが多く、ハウス内で増殖した。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。
いちご (生育・収穫期)	ハダニ類	平年：遅 前年：遅	平年：少 前年：多	平年よりやや遅い12月第3半旬に初発を確認した。その後も継続的に発生が確認されたが、発生量は平年より少なかった。	定植前の防除が徹底されたため、発生が少なかった。9月～2月にかけて気温が高かったが、天敵の活動も活発になり発生は抑制された。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。定植前のCO2ガス処理や、天敵の利用も進んでいる。
いちご (生育・収穫期)	ホコリダニ類	平年：－ 前年：－	平年：－ 前年：－	発生は確認されなかった。	－	－
いちご (生育・収穫期)	コナジラミ類	平年：早 前年：早	平年：やや少 前年：並	平年より早い10月第1半旬に初発を確認し、その後の発生も見られたが発生量は平年よりやや少なかった。	定植前の防除が徹底され、発生後も適期防除が行われたため、発生が抑えられた。	薬剤抵抗性を考慮した薬剤散布が実施されている。

イ 令和6年度 病虫害発生程度別及び防除面積

作物名 (作付面積)	病虫害名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
早期水稲 12,780ha (5月中旬までの移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち		1	59	1142	1202	6400	6400
	穂いもち				9	9	130	130
	紋枯病		4	154	2251	2409	9600	9600
	白葉枯病					-		
	ばか苗病					-	6400	6400
	イネシガラレセンチュウ					-		
	イネシガラレセンチュウ(種子消毒)					-	6400	6400
	もみ枯細菌病				9	9		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					-	6400	6400
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縮葉枯病	10	194	1433	4573	6210	6400	6400
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
	黄萎病					-		
	稲こうじ病					-	6400	6400
	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ			3	420	423	6400	6400
	セジロウンカ	9	151	1084	3840	5084	6400	6400
	トビイロウンカ					-	6400	6400
	ヒメビウンカ	1881	5270	4494	1072	12717	6400	6400
	ツマグロヨコバイ	375	756	1539	2631	5301	6400	6400
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオウムシ				68	68	6400	6400
	イネゾウムシ					-		
イネクロカメムシ					-			
斑点米カメムシ類	1802	1511	1983	2370	7666	10000	10000	
イチモンジセセリ				9	9	6400	6400	
フタオビコヤガ					-	6400	6400	
イネヨトウ					-			
アワヨトウ					-			
コブノメイガ				9	9	6400	6400	
イネミズゾウムシ			3	423	426	6400	6400	
スクミリンゴガイ					-	30	30	
普通期水稲 15,620ha (5月下旬以降の移植)	苗立枯病					-		
	苗いもち					-		
	葉いもち				162	162	12500	12500
	穂いもち				162	162	160	160
	紋枯病	3	74	756	3791	4624	7810	7810
	白葉枯病					-		
	ばか苗病					-	15600	15600
	イネシガラレセンチュウ					-		
	イネシガラレセンチュウ(種子消毒)					-	15600	15600
	もみ枯細菌病				32	32		
	もみ枯細菌病(種子消毒)					-	15600	15600
	ごま葉枯病					-		
	小粒菌核病					-		
	黄化萎縮病					-		
	縮葉枯病		0	8	605	613	12500	12500
	黒すじ萎縮病					-		
	萎縮病					-		
黄萎病					-			
稲こうじ病					-	12500	12500	

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
普通期水稻 (5月下旬以降の 移植)	褐色菌核病					-		
	赤色菌核病					-		
	葉しょう褐変病					-		
	褐色葉枯病					-		
	苗立枯細菌病					-		
	ニカメイガ					-	12500	12500
	セジロウンカ	0	33	767	5240	6040	12500	12500
	トビイロウンカ				32	32	12500	12500
	ヒメビウンカ	4145	4445	4062	2230	14882	12500	12500
	ツマグロヨコバイ	115	570	1886	4177	6748	12500	12500
	イネハモグリバエ					-		
	イネミギワバエ					-		
	イネキモグリバエ					-		
	イネドロオウムシ					-	12500	12500
	イネゾウムシ					-		
	イネクロカメムシ					-		
	斑点米カメムシ類	1079	1345	2144	3040	7608	7810	7810
	イチモンジセセリ					-	12500	12500
	フタオビコヤガ					-	12500	12500
	イネヨトウ					-		
アワヨトウ					-			
コブノメイガ				32	32	12500	12500	
イネミズゾウムシ				32	32	12500	12500	
スクミリンゴガイ					-	30	30	
麦 6,480ha	黒さび病					-		
	赤さび病		1	40	744	785	1300	1300
	黄さび病					-		
	小ささび病					-		
	うどんこ病		0	12	531	543	3240	3240
	赤かび病	3	83	716	2429	3231	3240	3240
	雪腐病類					-		
	黒穂病類					-		
	黒節病	69	229	628	1346	2272	650	650
	麦類縮萎縮病					-		
	小麦縮萎縮病					-		
	大麦縮萎縮病					-		
	雲形病					-		
	斑葉病					-		
	株腐病					-		
	立枯病					-		
	アブラムシ類			9	630	639	1300	1300
	ムギアカタマバエ					-		
	ハモグリバエ類					-		
	ムギダニ				1	1	1300	1300
かんしょ 365ha	かいよう病					-		
	つる割病					-	50	50
	立枯病					-	50	50
	イモキバガ					-	300	300
	ナカジロシタバ		183	183		366	300	300
	ハスモンヨトウ				18	18	300	300
	シロイチモジヨトウ					-		
	ヨツモンカメノコハムシ					-		
	コガネムシ類					-	150	200
	その他(食葉性チョウ目幼虫)			0	14	14	300	300
大豆 739ha	紫斑病		1	30	208	239	370	370
	さび病					-		
	菌核病					-		
	立枯性病害				1	1	370	370
	炭そ病					-		
	黒とう病					-		
	べと病	7	53	170	240	470	370	370
	葉焼病	84	159	196	132	571	370	370
モザイク病					-			

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
大豆	萎縮病					-		
	ウイルス病(わい化病除く)			0	24	24		
	わい化病					-		
	アブラムシ類					-		
	タネバエ					-		
	コガネムシ類				6	6	330	330
	ハスモンヨトウ				6	6	330	660
	食葉性チョウ目幼虫	3	157	398	61	619	330	660
	ハダニ類					-		
	ダイズサヤタマバエ					-	330	330
	マメヒメサヤムシガ					-		
	マメシクイガ	19	32	63	109	223	330	330
	シロイチモジマダラメイガ			0	24	24	330	330
	吸葉性カメムシ類	38	218	281	79	616	330	660
	ウコンノメイガ					-		
フタスジヒメハムシ					-			
ヒメサヤムシ類					-	330	330	
なし 355ha	黒斑病					-		
	黒星病				6	6	350	350
	赤星病			0	15	15	350	700
	うどんこ病	20	26	44	66	156	350	700
	輪紋病					-		
	ナシヒメシクイ	1	4	17	55	77	350	1050
	モモシクイガ					-		
	ナシマダラメイガ					-		
	ハマキムシ類				0	-	350	350
	ハダニ類	1	12	68	149	230	350	1050
	カメムシ類		0	5	40	45	350	1050
	カイガラムシ類					-	350	350
	アブラムシ類			0	21	21	350	350
	ニセナシサビダニ				3	3	350	350
	吸ガ類					-		
ナシチビガ					-			
茶 729ha	炭疽病			3	182	185	725	1450
	もち病					-		
	網もち病					-		
	輪斑病				17	17	725	1450
	チャノコカクモンハマキ		0	7	85	92	725	2175
	チャハマキ		0	7	85	92	725	2175
	チャノホソガ	0	3	27	133	163	725	2175
	チャノミドリヒメヨコバイ	83	88	124	151	446	725	2175
	カンザワハダニ	0	7	63	248	318	725	2175
	チャノキイロアザミウマ		0	49	477	526	725	2175
	ツマグロアオカスミカメ					-	725	2175
	クワシロカイガラムシ					-	725	1450
	ヨモギエダシヤク				17	17	725	725
	チャトゲコナジラミ	1	23	133	304	461	725	1450
	冬春トマト 118ha	疫病					-	
灰色かび病					0	-	110	330
モザイク病						-		
葉かび病						-		
青枯病						-		
萎ちょう病						-		
うどんこ病		3	6	14	24	47	110	330
黄化葉巻病					3	3	110	330
アザミウマ類					0	-	110	330
オオタバコガ					-	110	110	110
コナジラミ類			1	13	14	110	330	330
ハモグリバエ類						-		
アブラムシ類						-	110	330
トマトサビダニ						-		
ハスモンヨトウ						-	110	110

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
夏秋なす 229ha	うどんこ病	5	23	60	81	169	200	600
	灰色かび病					-		
	褐紋病	2	7	19	41	69	200	200
	褐色腐敗病				3	3	200	600
	半身萎ちょう病	50	29	34	37	150	200	600
	青枯病					-	200	200
	アザミウマ類	5	31	78	81	195	200	800
	コナジラミ類			0	42	42	200	600
	オオタバコガ	10	19	36	55	120	200	600
	ハモグリバエ類	3	11	29	57	100	200	600
	アブラムシ類		0	5	29	34	200	600
	ハダニ類		0	28	142	170	200	600
	ハスモンヨトウ					-	200	600
ホコリダニ類	15	21	34	48	118	200	600	
夏秋きゅうり 317ha	べと病	1	4	18	54	77	300	300
	炭そ病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	7	17	36	65	125	300	300
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					-	300	300
	灰色かび病					-	300	300
	褐斑病	1	5	20	59	85	300	300
	菌核病					-	300	300
	黄化えそ病	2	9	27	63	101	300	600
	退緑黄化病	23	29	47	66	165	300	600
	アザミウマ類	6	14	31	58	109	300	600
	ハダニ類					-	300	300
	アブラムシ類					-		
	コナジラミ類		1	11	77	89	300	600
	ハモグリバエ類			0	20	20	300	300
	ワタヘリクロノメイガ					-		
	オオタバコガ					-		
ハスモンヨトウ				2	2	300	300	
食葉性チョウ目幼虫					-	300	300	
冬春きゅうり 257ha	べと病		0	5	44	49	250	750
	炭疽病					-		
	疫病					-		
	うどんこ病	2	9	29	65	105	250	750
	斑点細菌病					-		
	モザイク病					-		
	灰色かび病					-	250	750
	褐斑病		0	4	29	33	250	750
	菌核病					-	250	750
	黄化えそ病				0	-	250	250
	退緑黄化病			0	11	11	250	250
	アザミウマ類	2	7	23	56	88	250	750
	ハダニ類					-	250	750
	アブラムシ類					-		
	コナジラミ類				0	-	250	750
	ハモグリバエ類		0	3	24	27	250	750
	ワタヘリクロノメイガ					-		
オオタバコガ					-			
ハスモンヨトウ					-	250	250	
食葉性チョウ目幼虫					-	250	250	

作物名 (作付面積)	病害虫名	程度別発生面積(ha)					防除面積(ha)	
		甚	多	中	少	合計	実防除	延防除
ブロッコリー 1,202ha	黒腐病	0	2	24	155	181	1000	1000
	べと病					-	1000	1000
	アブラムシ類				17	17	1000	1000
	コナガ					-	1000	1000
	ハスモンヨトウ	0	2	24	155	181	1000	1000
秋冬ねぎ 1,680ha	さび病	4	25	104	314	447	840	2520
	黒斑病	0	8	75	364	447	840	2520
	萎縮病					-		
	べと病			3	95	98	840	2520
	軟腐病			3	95	98	840	840
	白絹病					-	840	840
	シロイチモジヨトウ	152	239	368	425	1184	840	1680
	ハスモンヨトウ					-	840	1680
	アブラムシ類				6	6	840	840
	ネギハモグリバエ		3	59	431	493	840	2520
	ネギアザミウマ	550	708	360	59	1677	840	2520
ざといも 762ha	ネギコガ					-		
	汚斑病					-		
	モザイク病					-		
	疫病				11	11	150	300
	アブラムシ類	95	120	166	178	559	300	300
	ハダニ類					-		
ほうれんそう 1,817ha	ハスモンヨトウ					-	300	300
	べと病					-	1800	1800
	立枯病					-		
	アブラムシ類					-	200	200
	ハスモンヨトウ					-	200	200
	ヨトウガ					-	200	200
	ケナガコナダニ					-	200	200
シロオビノメイガ	108	131	214	323	776	200	200	
いちご 95ha	灰色かび病					-		
	うどんこ病				0	-	100	200
	モザイク病				0	-	100	200
	炭疽病					-		
	萎黄病					-	100	200
	アブラムシ類		0	3	13	16	100	200
	アザミウマ類		0	4	20	24	100	300
	コナジラミ類			0	8	8	100	100
	ハダニ類		0	4	21	25	100	300
	ハスモンヨトウ			0	8	8	100	100
チョウ目害虫			0	5	5	100	100	

(4) 令和6年度の病害虫発生予察情報等の発信

ア 病害虫発生予察警報、注意報及び特殊報等発表状況

(ア) 警報

なし

(イ) 注意報

発表年月日	内 容
令和6年4月15日	核果類（うめ、すもも等）・なし、ナシヒメシンクイ
令和6年5月10日	果樹全般、果樹カメムシ類
令和6年5月13日	野菜類・花き類、オオタバコガ
令和6年5月20日	ムギ類赤かび病
令和6年7月8日	イネ斑点米カメムシ類（イネカメムシ、ホソハリカメムシ）
令和6年7月12日	果樹全般、果樹カメムシ類
令和6年8月8日	ネギ・ブロッコリー・ダイズ、シロイチモジヨトウ
令和6年8月28日	なし、ナシヒメシンクイ

(ウ) 特殊報

発表年月日	内 容
令和6年10月18日	トマトキバガの誘殺について
令和6年10月31日	チュウゴクアミガサハゴロモの発生について

(エ) 発生予報

予報月	発表年月日	予報月	発表年月日
5月	令和6年4月26日	11月	令和6年10月24日
6月	令和6年5月28日	12月	令和6年11月26日
7月	令和6年6月26日	1月	令和6年12月24日
8月	令和6年7月25日	2月	令和7年1月27日
9月	令和6年8月27日	3月	令和7年2月26日
10月	令和6年9月26日	4月	令和7年3月21日

(オ) 注意を促すための情報

a 病虫害防除情報

防除時期が限定される病虫害や予報に合わせ、特に注意を促す必要がある病虫害について病虫害防除情報としてホームページ上で発信した。

発表年月日	作物別	内 容
令和6年4月26日	普通作物	ムギ類赤かび病について
令和6年6月26日	普通作物	イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ）について
令和6年8月6日	特産	チャのチャノミドリヒメヨコバイについて

b 調査結果等

病虫害の適期防除を促すため調査結果をホームページ上で発信した。

発表時期	内 容
令和6年4月～ 令和7年3月	各種フェロモントラップ等データ
令和6年5月24日	麦類ほ場内のヒメトビウンカの生息密度調査結果
令和6年6～8月	いもち病（葉いもち）感染好適条件出現状況
令和6年6～7月	気象予測データによるウンカ類飛来予測状況 （トビイロウンカ、セジロウンカ）
令和6年7月22日	いもち病発生状況調査結果
令和6年7月22日	水稻の斑点米カメムシ類の畦畔・雑草地発生調査結果
令和7年1月16日	ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査結果
令和7年3月12日	果樹カメムシ類の越冬密度調査結果
令和7年3月31日	イネカメムシ越冬状況調査結果

イ 発生予察情報（発生予報、注意報、特殊報等）、病虫害発生現況報告等の外部への提供

国（植物防疫課）、関東農政局及び日本植物防疫協会に、発生予察情報（発生予報、注意報等）、病虫害発生現況報告等を提供した。

植物防疫に関するデータベースサービスであるJPP-NET（運用主体：日本植物防疫協会）によって、病虫害防除に関する情報交換を国及び他県等と行い、発生予察及び防除指導に活用した。

ウ 発生予察ツールを用いた発生消長予測情報の提供

県で開発したツールを用いて、気象台の気温観測データと害虫種ごとの発育パラメータから今後の害虫の発生消長を予測し、フェロモントラップデータとともにホームページを通じて情報提供した。

・ナシヒメシンクイ 提供日：6月19日、7月5日、7月22日

これらの他、ヒメトビウンカの越冬世代幼虫を対象としたイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率調査において、供試虫採集・ウイルス検定実施時期の決定にも用いた。